

# サンタクロースの系譜

大串 紀代子

はじめに

キリスト教の国、とはいえない日本でも、クリスマスの祝いと賑やかさは年を追ってますます盛んになっている。11月になったとたんショッピングセンターに巨大なクリスマスツリーがきらびやかに点灯し、クリスマスに関連した商品や飾り付けが街に溢れている。北欧からは「正規の」サンタクロースが飛行機で来日し、いっそう気分をあおりたてる。しかし人々の話題はもっぱらプレゼントやパーティで、救世主誕生は二の次、三の次である。

プレゼントを中心とする楽しいイベントになってしまっているクリスマスだが、日本でもサンタクロースは健在で、子供達にとっては「眠っている間に何か特別な贈り物をもってきてくれる、優しくて愉快的な太っちょのおじいさん」になっているし、大人同士のプレゼントでも、「サンタさんから」と言い添えることも稀では無い。

ドイツ語圏、ドイツ、オーストリー、スイスなどの冬の祭りや習俗のなかでも、サンタクロース、すなわち聖ニコラウスとその関連の行事は、「大衆性」、「愛着度」、「知名度」、「地域性」、「分布度」、「奉納された教会やチャペルの数」など、どの点においても群を抜いている。

キリスト教には数多くの聖者がいて、それぞれに信仰を集め儀式や行事が行われているのに、なぜ聖ニコラウスだけがこれほどに「勝利の行進」<sup>1)</sup>を続けるのだろうか？ しかも、各地で行われている「聖ニコラウスの祭り」を詳しく観察してみると、その多様性は驚く程に豊かで、単なる「贈り物の分配者」とは全く趣を異にしているものも数多い。

聖ニコラウスはどのような存在として定着し、変化しながら形成されてきた

のだろうか？ 多様なニコラウス信仰や彼にまつわる伝説はどのように広まって行ったのであろうか？

本稿の目的は、非常に複雑な要素を含み、渾沌としたニコラウス習俗の系譜をできうるかぎり繙いてみることにある。

## 1. 聖ニコラウス信仰の誕生と伝播

### 1.1. 聖ニコラウスとその伝説

サンタクロースすなわち聖ニコラウスの原型は、4世紀小アジア南西部リュキア地方の町ミュラに実在したという司教、聖ニコラウスに帰するのが定説になっている。

さらに、同じリュキアで564年に没したピナラの司教、シオンの修道院長だったニコラウスの伝記とも混合して、6世紀から9世紀頃にかけてギリシャ、ビザンチン帝国の聖者に変貌していった。二人とも奇跡を起こし、善行の人として知られ、6世紀のギリシャ語文献が現存する最古のものである。ただし当初はある一地域の、大衆信仰の一対象者にすぎなかった。しかし、時代を経るに従い、ニコラウス信仰は急速に広まり、8世紀にはローマでも彼の名は知られ、9世紀なかばには殉教や苦難伝説をテーマにした文学作品でも扱われた。

また、「ニコラウス」という名称については、「黄金伝説」に強引な解釈がある。ドミニコ会士であり、ジェノヴァの大司教をつとめたヤコブス・デ・ウォラギネ(1230頃~98)が集成した「黄金伝説」では、聖ニコラウスは使徒聖アンデレに続いて、いならぶ聖者たちの筆頭に挙げられている。

「ニコラウス (Nicolaus) は、〈勝利〉を意味する *nicos* と〈民衆〉を意味する *laos* とに由来し、したがって民衆の、すなわち通俗にして低劣なあらゆる悪徳の、克服者を意味する。…あるいは、*nicos* (勝利) と〈称賛〉を意味する *laus* とから来ていて、勝利にかがやく称賛を意味する。…あ

るいはまた、〈光輝〉を意味する *nitor* と *laos* (民衆) とに由来し、したがって、民衆の光輝という意味である。]<sup>2)</sup>

ウォラギネが誉めたたえるのはニコラウスという名前だけではない。両親と家庭環境、生誕時の奇跡、信仰篤い成長期、長じての数々の奇跡と善行など、生涯を通じていかに彼が「聖者」の名にふさわしいかが羅列されている。つまり、「黄金伝説」が執筆された13世紀にはすでにニコラウスの名声と地位は不動のものになっていたのだ。

ヨーロッパでのキリスト教は、ギリシャ・ローマ神話、ゲルマン神話、さまざまな民間伝承などの渦のなかにあって、聖人や殉教者たちの言行の伝説化、神話化を推進せざるを得なかったし、ウォラギネの時代、キリスト教世界内部の抗争も熾烈をきわめていた。<sup>3)</sup> すなわち、聖ニコラウスは、キリスト教世界の強化、再構築の要請に十分答える存在として登場しているのである。

ミュラのニコラウスについての最古の文献とされる“*praxis de stratelatos*” (3人の將軍行状記)については、アンリッヒの詳細な研究<sup>4)</sup> が知られている。アンリッヒによれば、内容や時代背景からこの書はミュラのニコラウスの生存期、コンスタンチン帝の時代(306-337)に成立したらしい。しかし、前述のように、現存しているのは後の6世紀の写稿本で、政治的状況、教会勢力状況からして、ユスティニアス帝(527-565)の時代のものと推定されている。

無実の罪で死刑を宣告され、あやうく処刑されかかった3人の將軍達の命を助けた話は、後々のニコラウス伝説の核となった。評判が高かった証拠に、手稿本が50種以上残っている。<sup>5)</sup>

ミュラのニコラウスの生涯全般について記述された最古の文献は、750-850年頃おそらくコンスタンチノーブルで成立した“*Vita per Michaellem*”といわれ、さらにこれを下地にして、9世紀前半には伝記、“*Methodius ad Theodorum*” が書かれた。<sup>6)</sup>

一方、シオンのニコラウスに関しては、彼の死(564)の後程なくして伝記が編まれたらしい。つまり、現存する最古のミュラのニコラウスの將軍伝説が

書かれたのと同時期である。ミュラのニコラウスとは逆に、歴史的具体的資料が多い。

ミュラのニコラウスの「将軍の話」が知られるようになると、「奇跡をおこした聖ニコラウス」の生涯についての要望が高まる。それに答えたのが、上記のギリシャ語の伝記、9世紀前半の“Methodias ad Theodorum”と Simeon Metaphrates による伝記だった。10世紀後半になって、「奇跡譚」執筆者の Simeon Metaphrastes がこれまでのニコラウス伝説を組み合わせ、前記の“Vita per Michaellem”などを下敷きにして、ミュラのニコラウスもシオンのニコラウスも混ぜ合わせて「聖ニコラウス伝説」を著した。誤謬によるとはいえ、これが後々強力に発展してゆく「伝説」の始まりだった。単なる誤解や粗雑な文献調べのせいばかりでなく、当時のキリスト教徒たちの願望と時代の要求がそうさせたのかもしれない。

ただし、「3人の将軍の逸話」は、この伝記が書かれるより100年以上前、9世紀前半の手写本がローマ教会支配下のライヒナウやマイントの司教区の蔵書に残っている。

6世紀以降、ローマはビザンチンの影響下にあり、数千のギリシャ人地区、ビザンチンの役人達、ギリシャ教会もいくつかあった。したがってギリシャで崇拜された聖者は、抵抗なくローマへ、西欧へ伝わったとみられる。海上交易も古くから盛んだったから、人間や物品だけでなく奇跡譚も伝播した。

755年から770年の間に建立されたローマの聖アンジェロ教会の聖遺物の飾りに、ニコラウスの名が石彫りされているし、<sup>7)</sup> 現存する最古のニコラウス像は、8世紀もしくは9世紀に作られたローマの Santa Maria Antiqua 教会のフレスコ画である。壁面に聖アタナシウスとエラスムスにはさまれ、長衣に分厚い書物を抱えて立つニコラウスは、完全なビザンチン様式で表現されており、ギリシャ文字による指示“HAGIOS NIKOLAOS”がある。

9世紀後半から10世紀にわたって書かれた数多くのニコラウス伝説、例えば880年頃ナポリで書かれたらしい Johannes Diaconus による“Vita s. Nicolai episcopi”などのなかで、上記2書、“Methodias ad Theodorum”と Simeon

Metaphrates の「ニコラウスの生涯」は西欧キリスト教社会に特に強い影響を与えた。特に後者は他の伝記群の基調テキストの位置を占めたために、ミュラのニコラウスとシオンのニコラウスの混合は決定的なものになった。歴史的事実と異なる伝記が流布されたとはいえ、まず 4-5 世紀にミュラの司教への崇拝があり、さらに約 200 年後の同名のシオンの司教への崇拝が加わることによって、強力な「ニコラウス信仰」が形成されていった点に関しては研究者の意見は一致している。

ニコラウス信仰が東方(小アジア)から西欧に伝わると、さらに加速的に広まり、伝記も絶えまなく書き続けられた。特に中世にはいわゆる「民衆語」で書かれるようになる。12 世紀半ばにはアングロノルマン人 Robert Wace が先行の諸作を参考にしつつ、口承で民間に伝えられていたと思われるエピソードを加えて、古フランス語による民衆本を著した。ドイツ語による最古の伝記は、13 世紀に成立したものだが、韻文形式で断片しか残存していない。

西欧のニコラウス伝説に決定的な影響を与えたのは、前述したウォラギネ(1230 頃~98)の「黄金伝説」である。ウォラギネは主として上述の Johannes Diaconus の著作を参考にしたらしい。<sup>8)</sup> ニコラウスの神格化を強調するこの書はすぐに数多く筆写され、流布した。15 世紀終わりに印刷技術が開発されると、教会側からも民衆側からも要求に答える著作として爆発的広がりをみせた。ただし、それらの多くは、各地の民衆語に、内容もかなり自由に書き換え、加筆されたようで、13 世紀の原作には 176 話しかないのに、例えば 1470 年に印刷された版には 448 ものテキストが含まれている。<sup>9)</sup>

聖ニコラウスの伝記の記念碑的作品である「黄金伝説」には含まれていないが、中世以来ニコラウスの奇跡の一つとして西欧で重視されているのは、「塩桶の中の 3 人の学生(生徒)の蘇生」である。すなわち、ウォラギネが下地にした Diaconus はじめ、ギリシャ系の説話ではなく、もっとそれ以前からもともと西欧、特に北フランス地域で口承説話として語られていたものらしい。それを既述の Robert Wace が彼の「ニコラウス伝記」にとりいれてから定着し、<sup>10)</sup> 今日にいたるまで特にニコラウスの図像モチーフとして重要な役割を果たしてい

る。塩樽のなかに生物を漬け込む発想は、北フランスにノルマン人、すなわちヴァイキングが多く定住したこと、Robert Wace がノルマン人であったことと無縁ではなからう。

中世のみならず現在もまだ、「ニコラウス伝説」は書き換えられ、加筆され、変貌しながら発展し続けている。それは狭い意味での宗教的、キリスト教的発展とはいえないが、広義の社会的、文化史の意味では驚くばかりの生命力としたたかさを示しているのだ。

### 1.2. 西欧におけるニコラウス信仰のきっかけ

少なくともヨーロッパに入ってからのニコラウス信仰の一つの特徴は、対象である聖ニコラウスを繰り返し図像化したり、演劇的要素を加味して具現化したりすることにある。これは、ニコラウス信仰が当初から民衆の要素を多分に含んでいることと関連している。歴史的ニコラウスがいかなる人物であったか、彼が実際にはどのような人生を送ったか、などの史実は民衆にとってはそれほど重要ではなかったかのように見える。

それよりも、「...であってほしい」という人々の潜在的願望がそれぞれの時代や社会集団のなかで「ニコラウス」という形や名前を借りて形成され、変化して来たのであろう。民衆にとっては、抽象的な教義や概念よりも、具体的に目の前にあらわれている存在のほうがどれだけ身近かわからない。その上近世にいたるまでかなりの人々が文盲だったことを思えばなおさらである。

歴史的にみると、二つの事件が、西欧キリスト教社会で、ニコラウス信仰を促進させるきっかけになった。テオフアノの結婚と聖遺骨の略奪である。

西欧での最古のニコラウス像は、既述のローマの Santa Maria Antiqua 教会のフレスコ画だが、かなり損傷が激しい。ドイツ圏での最古の像は、9-10世紀にかけて制作されたビザンチン様式のモザイク・イコンで、アーヘンの聖洗礼者ヨハネ教会に現存する。保存状態もよく、かなり細部まで観察できる。このニコラウスは、厳粛な細面で、ビザンチン様式の特徴の、大きな瞳、真直ぐな



図1. アーヘンの聖洗礼者ヨハネ教会の聖ニコラウス像, 9-10世紀成立

鼻、小さな口をしている。額はかなり高く、くちひげ、長くはないあごひげもたくわえている。頭のまわりは光輪でふちどられ、濃い色の僧服に、司教のしるしの十字のついた白い肩かけ、右手はギリシャ風の祝福の印を結び、左手は僧服で包むように分厚い聖書物を抱く上半身像である。背景にはビザンチン風僧院、ふちどりは十字を花のようにアレンジした美しいイコンである。

このイコンは、972年、ビザンチンの王女、テオファノがオットー2世(973即位-982)と結婚した時嫁入り道具の一つとして持参した、と伝えられている。神聖ローマ帝国の基礎を築いたといわれるオットー1世(オットー大帝 936-973)の後を受けて、帝国強化のためにビザンチン帝国から王女を迎え入れたのであろう。一方にはビザンチン帝国の隆盛があり、一方には100年前の「聖像禁止令」など全く消滅させてしまった西方の強い聖像崇拜熱があったと思われる。この結婚の時以来、ドイツ圏でもニコラウス信仰は爆発的に広まった。

11世紀頃、無名のギリシャ人のドイツ旅行記が残っている。

「町でも僻地でも、どこでも誰でも、この聖者の名を知らぬ者はいない。… たくさんのニコラウス教会が建立され、老若男女をとわず、聖ニコラウスの賛歌を歌い、祝っている。…」<sup>11)</sup>

もう一つの事件は、1087年、南イタリアのバリの商人達による聖ニコラウスの遺骨の略奪である。

11世紀中期地中海地方は政治的にも社会的にも混乱した。トルコが勢力を拡大し、1071年には、ローマ人ディオケネス將軍率いるビザンチン帝国軍は、アルメニアのマンツィケルトでトルコ軍に大敗した。勝者トルコ軍は港町ミュラも通過した。ほとんどのミュラの住民たちは略奪や暴行を恐れて山岳地へ逃れ、町は荒廃して放置されていた。1087年5月8日、南イタリアの港町バリの商人達が、ミュラの町にあった聖ニコラウスの墓から遺骨をバりに持ち帰った。

しかしこの事件は、小アジア、ギリシャ系の教会と、西方キリスト教会の間に極端に大きな闘争は生まなかった、という。同じキリスト教でも両者の信仰形態、特にキリスト復活に関する教義と崇拜形態が異なっていたためである。

ギリシャ系が「聖像」すなわちアイコンを重視するのに対して、西方教会では遺骨や遺物を強く崇拜し、しかもそれらの遺骨や遺物をできるかぎり身近に置きたい欲求が強かったからである。両者のこの傾向は、現在にまで続いている。

それでもこの事件は、すくなくとも二つの余波を残した。

一つは、バリとベネチアの争いである。地中海交易の主導的立場にある、と自負していたベネチア商人達はいたく自尊心を傷つけられた。すぐにミュラに赴き、ニコラウスの墓から別の遺骨を持ち帰り、正当性を主張した。墓の中には数体の遺骨があった、という。18世紀にいたるまでベネチアは「本物はこちら」を主張していたが、実際には遺骨移送直後に決着はついていた。

遺骨略奪に対し、ギリシャ教会側は即刻返還を要求したが、西方教会は狡猾な手法で遺骨を我が物とすることに成功した。「ひとまず中立的な教会に安置する」、「新たに聖ニコラウス教会を建立してそこに納める」ことにし、2年後の1089年10月1日、教皇ウルバン2世によって新しい教会が開かれた。1098年にはウルバン2世はバリに公会議を召集、「聖ニコラウス教会」を会議場にした。結局、1105年教皇パシャリス2世によって聖遺骨はバリからローマに運ばれてしまった。付け加えれば、聖遺骨のバリへの移動を、西方キリスト教世界の人々は決して「略奪」とは呼ばない。あくまで「移送」である。

1957年、遺骨の科学的調査が行われ、ニコラウスの顔の再現まで試みられたが、「遺骨は当時のものの可能性あり」という結果にとどまった。<sup>12)</sup>

中世から現在にいたるまで、キリスト教会、特にカトリック教会の聖遺骨、聖遺物崇拜はなみなみならぬものがある。アルプス以北で聖ニコラウス関連で記録に残っているものは、11世紀以降膨大な数にのぼる。1018年トリーア、1028年ケルン、1046年ベルギーのスタブロート、1048年リュエネブルク、1049年エルザス、1050年エヒターナッハ、1061年ブラウワイラー、1061年ヒルデスハイム、1063年ベネディクトボーレン、1064年ミンデン、1065、1068、1077年にはロートリンゲン各地、という状況である。それぞれはごく小さな破片であったり、他の教会から分与してもらったりだが、ドイツ語圏でのニコラウス信仰の広まりの裏付けとみなせる。

これとは別に、1255年、ロートリンゲンの騎士オベール・ド・ヴァランジェヴィル (Aubert von Varangeville) が十字軍遠征の帰路聖ニコラウスの指の骨をもたらしたという話が伝わっている。メシヤンの著作<sup>13)</sup>ではこの騎士をニコラウス信仰の功労者として扱っている。

彼がもたらした指の骨を聖遺骨としてロートリンゲンの故郷の町ポールに聖ニコラウス教会が建立され、有名な巡礼地の一つとなって、町名までサン・ニコラ・ド・ポールになったが、史実には合っていない。この教会は1092年以前に建築が始まっているし、1087年には遺骨はバりにすでに運ばれており、第一回十字軍は1095年だからである。

しかし、ロートリンゲンがニコラウス信仰の中心地の一つであったこと、内陸の町に奇跡譚が広まったことは、意味がある。それまでのニコラウス信仰の町は主として港町であり信奉者達は航海を業とする人々が中心だったからである。暴雨風雨や船舶災害の守護者としてのニコラウスに、内陸の人々の苦悩、とりわけ無実の罪で苦しむ人々の救済者としての機能が加わったからである。<sup>14)</sup>

聖ニコラウスほどさまざまな社会集団、さまざまな職種の守護者になった者はいない。あまりに多すぎて相互矛盾を示すほどである。この聖者がいかに民衆とともにあり、それぞれの地域や集団の口承伝説や俗信をのみこみながら発展し変化してきたか、を解明するのは容易ではない。

## 2. 聖ニコラウスの奇跡

### 2.1. 3人の将軍

既述のように、現存する最古のニコラウスの奇跡は、5世紀なかば、ユスティニアス帝のころに記されたと思われる「3人の将軍」の話である。

「コンスタンティン帝の命を受けた3人の将軍は、暴風のためミュラの隣町、アンドリアケに漂着した。突然あらわれた外国軍人と地元軍との摩擦を避けるため、聖ニコラウスは彼等のもとに急ぎ、信を得、客人としてミュラへ連れて

行った。そこで3人は、買収された総督が3人の無実の騎士を死刑に処する場に遭遇した。刀が振りおろされそうになっていたが、聖ニコラウスが彼等を助けた。後に將軍達は勝利をおさめて帰国したが、今度は自分達が皇帝の廷臣達の讒訴によって捕らえられてしまった。皇帝が死刑を命じたと聞き、彼等はミュラでの事件を思い起こし、密かに聖ニコラウスに祈った。その夜のうちにニコラウスは皇帝と讒訴した執政官の夢枕にたち、彼等の非をさとした。翌朝皇帝は聖ニコラウスの生活と奇跡を知ると、將軍達を赦しただけでなく、贈り物を持たせてミュラに向かわせた。」

この二重の奇跡譚は単にニコラウスの偉業やキリスト教宣教だけでなく、「3」という数字がすでにある種の「聖性」を持っていたこと、登場する被害者は騎士階級以上であること、過った判決をするのは皇帝や執政官などであり、低い階級の人間は登場しないこと、「夢のお告げ」が強い影響力を持っていることなどからしても、かなり早い時期に成立したことがうかがえる。

この奇跡ゆえに聖ニコラウスは、無実の罪に捕らえられたり、処刑されそうな人々の守護者となった。1341年、パリの弁護士組合は聖ニコラウスを彼等のパトロンに選んだ、という。<sup>15)</sup>

## 2.2. 3人の処女

「もともとは貴族の階級にあった男が、経済的に没落してしまい、3人の娘達に身分にふさわしい嫁入り支度もとのえてやれなくなった。それどころか生活費のために娘達は春をひさぐことになってしまった。折しも、若年ながら莫大な親の遺産を相続したニコラウスがこの話を聞き、三夜続けて密かに黄金の玉を眠っている娘達の枕元に投げ入れた。驚いた父親は、三夜目にこの善意の贈与者をつきとめ、名を尋ね、礼を言った。」

前話と同じくこの話もニコラウス生存時の行為で、既述の9世紀のニコラウス伝記諸作でも語られている。「黄金伝説」には無論のこと、ダンテの「神曲」にも取り入れられている。<sup>16)</sup>

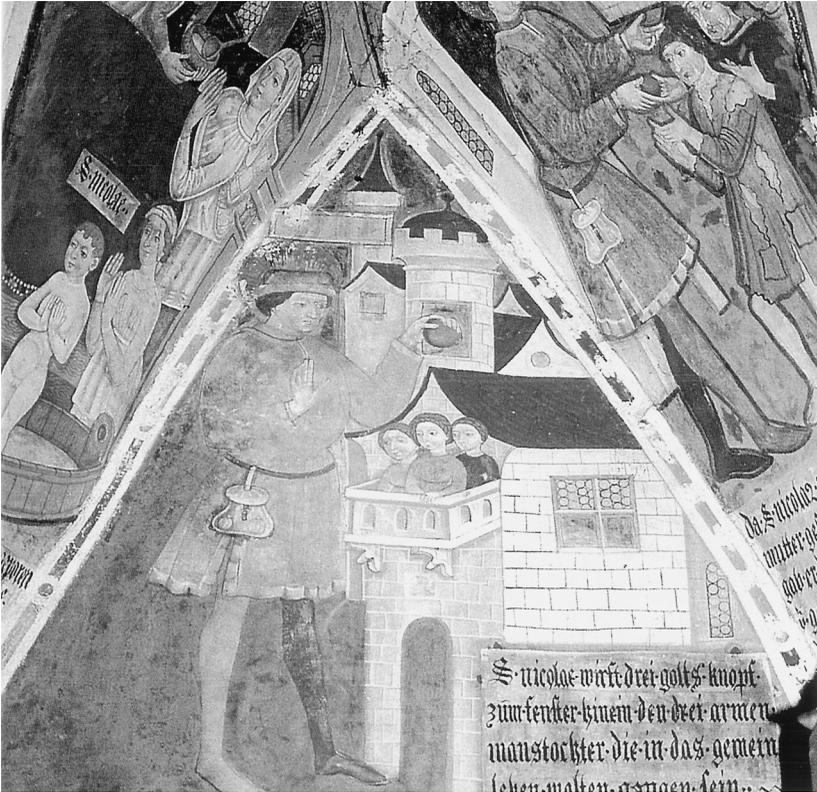


図2. 南チロルの聖ニコラウス教会のフレスコ画, 1475年頃成立

1475年に建てられた南チロルの聖ニコラウス教会のフレスコ画には、ニコラウスは短衣の上流市民の服装をした若者として描かれている。貴族の館のバルコンには三人の娘達がいるが悲し気に下を見下ろしている。極端に大きく描かれたニコラウスが開いた丸ガラス窓から黄金の玉を投げ入れようとしている。父親の姿はないが、画面右下に説明文がドイツ語で書かれている。

「聖ニコラウスは、恥ずべき生活に入ろうとしていた困窮した男の3人の娘に、窓から3個の金の玉を投げ入れる。」

伝記上でも、この当時ニコラウスはまだ司教になっていなかったが、図像と



図3. 南チロルの聖ゲオルグ教会のフレスコ画. 14世紀末成立

して残されているほとんどすべてが司教姿で描かれている。

例えば14世紀末、同じ南チロルの聖ゲオルグ教会のフレスコ画では、イタリア風の高い建物の奥の部屋の椅子に父親がまどろんでおり、娘達は画面中央に立っている。一人は父親の手をそっと握り、一人はその娘に声をかけている。ドアから外へ出ようとしている左側の娘の手からは、文字が書いてある巻き物がこぼれ出ている。

「主よ、聖ニコラウスよ、お許し下さい。私達は食べなければならないのです」

この声に呼び寄せられたように司教姿の聖ニコラウスが扉の前に立つ。頭に



図 4. ロットヴィルの聖十字寺院祭壇画, 16 世紀前半成立

は司教帽と光輪、左手に司教杖、右手には大きな金の玉を持って、今まさに投げ入れようとしている。画面奥の娘達のベッドの上にはすでに金の玉が一つ、ニコラウスの頭上のバルコンには天使がもう一つ金の玉を抱えて、下のニコラウスに渡そうとしている。

この画でも娘達のベッドは一つしか描かれていないが、もっとはっきりしているのは、16 世紀前半に描かれたロットヴィルの聖十字寺院の祭壇の右扉に描かれた図である。三人の娘達は一つベッドの一つの枕に並んでねむり、そのかたわらには疲れた表情の父親がベッド横の椅子に腰掛けているのか、ひじをベッドについて、眠っている。赤いマント、赤い司教帽、右手に白い司教杖を持ったニコラウスが、毛布の上、娘達の顔のすぐ下に一つずつ金の玉をそっと置いている。このニコラウスは司教姿とはいえ大変若々しく、ひげはいっさ



図 5. ユーバーリンゲンの聖ニコラウス寺院の石像。1300年頃成立

いない。

ドイツ語圏に入ってからニコラウスは、古い時代のものほど若い青年姿で表現されている。1300年頃制作されたポーデン湖畔のユーバーリンゲンの聖ニコラウス寺院の石像も、司教帽を着け、威厳のあるくっきりとした青年座像で、後に流布した温和な優しいイメージとは程遠い。

いずれにせよ、この「3人の処女の救済」によって、後の聖ニコラウス信仰での二つの要素が確定した。

一つは、ニコラウスの具体化、図像化には、「三つの黄金の玉」が不可欠になったことである。数多くの聖者にはそれぞれを規定する「採りもの」「シンボル」があるが、聖ニコラウスは「三つの玉を抱えている」ことになった。ただし、オーストリーやバイエルン地方などでは「三つのリンゴ」の場合もある。マイセンによれば、<sup>17)</sup> 豊穡を約する来訪神としてのニコラウスは、ナッツ類や果物、特にリンゴを贈り物としてもたらしたための混同である。

第二点は、「贈与者」としての機能である。彼がもたらす贈り物は、知り合いの人間同士の贈り物ではない。もしそうなら、義務からにせよ個人的愛情からの贈り物にせよ、ある種の制約を生み、返礼の負担が被贈与者に生じるからである。

聖ニコラウスの贈り物は、善霊や妖精や「超人間的存在」からの贈り物と同じく、感謝の意を表すだけでよい。贈り物が秘かに、知らない間、眠っている間にもたらされるのもそれゆえである。民衆の心にニコラウスが強く根付いた最大の理由かもしれない。威厳ある神の前ではあまりに小さく、ろくな善行を行っていないことを自覚している人間にも、その存在を肯定し、価値ある贈り物、豊穡や健康や安全をもたらし、守ってくれるからである。

3人の娘達への贈り物は、婚礼資金であったことから、聖ニコラウスは「愛情」「幸福な結婚」の守護者ともなった。既に意中の人がある娘にも、結婚相手を探す若者にも、特にフランスやベルギーで聖ニコラウスは良き守護者として今日でも崇拝されている。

(つづく)



図 6. ディーボルト・ラクバー版「黄金伝説」挿絵。15世紀中頃成立